高橋是清の今日的意義

板谷敏彦

本日は、昨年出版しました『国家の命運は金融にあり　高橋是清の生涯』に沿って、「高橋是清の今日的意義」というテーマでお話しします。

この本は、週刊「エコノミスト」に二〇一八年から四年半、計二一七回連載した内容をまとめたものです。できるだけ真実を追求するために、現場に当たったり、高橋是清の子孫にお会いしたり、いろいろな学者の方と議論しながら書きました。是清を題材にして小説を書かれる方が参考にする『高橋是清自伝』は、是清が現役の政治家のときに、朝日新聞に連載された記事をまとめて本にしたものです。日露戦争の最中で終わりますから、本を書く方は日露戦争までは詳しく書けるのですが、その後は史料が散逸してしまい、書きにくくなります。私が執筆するに当たっては、自伝の後半を補うという目標もあり、後半がかなり分厚くなりました。

さて、是清のエピソードはとても多いので、幾つかピックアップしてお話しすることにします。

是清は、一つ目は教育者として、二つ目は官僚として、三つ目は金融（日銀）マンとして、四つ目は政治家として、四つの人生を生きたのではな

いかと私は考えています。

一、生い立ち・教育者としての高橋是清

『高橋是清自伝』によりますと、是清は一八五四年に、幕府御用絵師・川村庄右衛門の私生児として生まれました。幕府の御用絵師であれば、当時の人事興信録、武鑑に載っているはずです。ところが似たような名前の人はいるものの、どうも違うようで、特定できませんでした。ですから、『自伝』はかなり盛られている可能性があります。当時、御用絵師には狩野派と住吉派の二派があり、町狩野といって、旗本・御家人相当以外の狩野派の町絵師がいたので、住んでいる場所などを考慮すると、その一人ではないかと思われます。

是清は、私生児として生まれてすぐ、仙台藩の高橋家に養子に出されます。しかし、高橋家ではまもなく実子が生まれたので、その家でも余り者になってしまい、おばば様に育てられます。おばば様は、仙台藩の中でも顔ききのやり手で、宴会を仕切り、仙台藩のお偉方とも昵懇になりました。当時は、開国か攘夷かで仙台藩も右に左に揺れていた中、アメリカに留学生を出すという話がありました。そこで、是清は横浜で勉強して、留学生としてアメリカに送り出されました。

是清は、留学先のアメリカで奴隷のような扱いを受けたと言われることがあります。当時のカリフォルニア州の賃金を調べると、英語を話せる人が月に約一二ドルだったようです。是清は、子どもでなおかつ英語が話せませんでしたが、それでも賄い付きで月に四ドルでした。また、帰国する際には餞別をたくさんもらっています。

他方、是清は日本では足軽の身分であり、仙台藩では足軽は百姓の扱いです。渡航証明書には「仙台藩百姓高橋是清」と記載があります。当時、百姓の子どもが日本橋の商家などに奉公に入ると、一年、二年は給料が出ません。しばらくしてやっと年二両出るかどうかです。当時のレートは一ドル＝一両ですから、是清は足軽でありながら、月に四ドル、年に四八ドル、お餞別も入れると約一〇〇ドル（約一〇〇両）もらったことになり、日本では大金持ちだったのです。

是清は、日本に帰ってきて先生になりますが、なりたくてなったわけではありません。当時の日本では、外国人の先生を呼んできても、英語を話せる人が全くいないので、通訳が必要になり、まだ小学校六年生ぐらいであった是清が通訳として先生になっていったのです。当時の通訳は給料がとてもよく、大金持ちになって、芸者遊びを覚えました。その結果、遊び過ぎて仕事をクビになり、芸者のヒモになります。芸者の箱持ちをしていた時期があるというのは、学校の先生をして金を儲け、遊び過ぎて芸者のヒモになったという経歴からもわかります。

それでも、今の佐賀県の唐津から、先生として来てほしいという話があり、これを受けて唐津で英語の先生となります。その次は文部省の通訳官を務めました。このように、是清は、最初は語学力を生かした仕事を多くこなしています。

その後は、大学予備門の先生にもなりました。この仕事も給料がよかったようです。さらに、ちょうど西南戦争の頃、コレラが流行し西南戦争の死者の二〇倍程度の人が亡くなりました。そこでコレラの対策のために、香港からの防疫の資料を参考に対策を立てることになりましたが、全部英語ですので、ここでも通訳としての能力を活か

し、また一財産を稼ぎました。

ある時、越後の米商人の茅野茂兵衛という大金持ちが、引退して、神田のやぶそば辺りに屋敷を構えて、のんびり暮らしていたところ、是清はその二階に下宿することになりました。隣の敷地には、加賀藩の佐野鼎によって創立された共立（きょうりゅう）学校がありました。佐野はコレラで亡くなっており、廃校のようになっていた隣の学校を何とかしてくれと茅野に頼まれて是清が立て直したのが、今の開成学園です。あまり知られていないのですが、開成学園の史料にも、是清の挨拶などが今でも多く残っています。

是清は、どのように学園を立て直したのか。当時、是清は後の旧制一高になる大学予備門の先生をしていました。その頃は、予備門には日本全国から生徒が入ってきて、初めて英語に接する子供たちもいました。入学してくる子供たちのレベルを上げたい、入学に耐え得る学力をつけさせたいという気持ちから、予備門の先生を集めて予備校をつくり、一回目の試験では、入学定員の約半分がこの学校の出身でした。今なら、問題になりそうな話です。当時の入学者には、秋山真之、岡田啓介、夏目漱石、正岡子規などがおりました。

これまでの仕事で財を成した是清は、第四銀行（現第四北越銀行）に五〇〇〇円の貯金がありました。現代では一億円ほどの価値になります。この時代は、西南戦争のときに政府が紙幣を刷り過ぎて、インフレが起こり始めていました。大蔵卿の大隈重信は、こんなに紙幣が安くなるのは許せないということで、政府が持っている銀を売って、紙幣の価格を買い支えようという話が持ち上がったのです。この紙幣と銀の交換比率の相場を「銀紙相場」といいます。

そこで、隠居している茅野老人が是清に、「政

府が出るから、相場としては間違いない。絶対に儲かるから、おまえも一口かまないか」と言って、是清も参戦したのですが、結局、明治一二年（一八七九年）、大隈重信が敗退し、是清たちも大きな損失を出しました。

銀紙で失敗した是清は、次は米相場だと、米を買い上げていきました。銀貨相場と米価は連動しています。手数料がもったいないので、自分で六二商会という仲買店をつくりました。六二商会という名前は、会社を任せた六次郎という男の儲けが二割だったことに由来します。儲かったと思ったところで、政府が米市場を閉鎖したため、中小の新しい仲買人が全部潰れ、またまた大失敗です。当時の市場は信用取引ですから、大きなレバレッジをかけて取引しています。そのため是清は、日本の相場は投資ではなく投機だという考え方を生涯持ち続け、株式市場にはかなり冷淡でした。

大隈重信が明治一四年の政変で追い出されて、かわりに松方正義が大蔵卿に就任します。松方デフレで有名ですが、松方は政府紙幣を整理していきました。明治一五年（一八八二年）には日本銀行が創設され、日銀が紙幣を発行するようにしたおかげで、インフレが徐々におさまりました。松方デフレは、評判は悪いのですが、インフレを抑えたという意味で大きな役割を果たしています。

このことが、当時の元老たちに成功体験としてすり込まれたと思います。つまり、紙幣を刷り過ぎるとインフレになる。抑え込めば直る。ですから、日露戦争で債券を発行するときも、政府首脳は非常に慎重な態度をとりました。それは西南戦争前後のインフレ体験があったからです。是清自身も、これによって通貨発行とインフレの関係に一つの概念を植え付けられたのではないかと思い

ます。

二、官僚としての高橋是清

是清が相場で失敗した後、多くの友人が留学から帰国しました。友人は、例えばエール大学の学位を取るなどしっかりと学問を修めているのに対し、自分には何もないというのが、是清の生涯のコンプレックスでした。是清は、二・二六事件で殺される直前まで、三省堂のコンサイス辞典を片手に原書を読む習慣がありました。大蔵省の秘書が是清の奥さんに、「何で先生はずっと勉強しているんですか」と聞くと、「実は学位がないことにコンプレックスを持っている。私みたいに学位のない人は一生涯勉強しなきゃいけないんだと言っていましたよ」と奥さんが言ったという記録が残っています。

しかし、今さら学校に入りなおすわけにもいかないので、官僚になってしっかり仕事をしようと思い、農商務省に入って特許制度をつくり、一八八四年には初代特許庁長官に就任します。特許庁のホームページを見ると、是清が特許の父であることがわかります。郵便制度を作った前島密並みに、偉人と呼ばれるような仕事をしています。

是清は、農商務省で前田正名と知り合い、原敬とパリで出会います。人間関係に幅を持ったのがこの時期です。前田は、もともと薩摩藩士です。薩摩スチューデントといって、幕末に薩摩藩が幕府に黙って一五人の留学生をイギリスに送り込むのですが、前田は身分が低いために、そのときの人選に漏れてしまいます。それでも諦めず、薩摩辞書という、当時できていた英和辞典を勝手に出版してお金をつくり、現金を持って大久保利通のところへ行って、「半分お金をつくったから、半

分出してくれ」と言って、フランスに留学したという、すごい人物です。そして、帰国後は農商務省に入りました。

余談ですが、幕末から活躍していた前田は、薩摩藩と長州藩のもめ事の交渉役を担っていました。身長が一五〇センチもなく、それでは長い刀が抜けないだろうと、剣術の名人の坂本龍馬が自分の短めの刀を前田に持たせて送り出しました。また、前田は、西南戦争の最中に大久保利通に会いにきて、「こんなときに申しわけないけど、日本がパリ万博に参加するからお金を出してくれ」と言って、出資してもらいます。そのときに「おまえに全部任せるからしっかりやってこい」と言われて、脇差をもらいます。ですから、彼の差料は、龍馬の刀と大久保利通の脇差という、とても豪華なものなのです。また、余談ついでに言うと、前田は大変よく働き、日本一の大金持ちになります。松下幸之助が相続税を払う前まで日本記録を持っていました。

さて、是清は「特許制度の父」で引退しても、男爵ぐらいにはなれたかもしれませんが、前田に「ペルー銀山をやろう」と誘われます。このエピソードは、儲け話に乗ったみたいにおもしろおかしく書かれることがあり、私が執筆した本でもそのように書いているきらいがありますが、外国を見てきた是清は、帝国主義の時代に欧米の国々が植民地で好き勝手なことをやっているのを見て、日本も是非海外に雄飛しなければという考えを持っていました。ところが、日本は後進国だから、英語圏では難しいだろう、だったら南米、ペルー辺りがよかろうということで、出ていったのです。

その後、一八八九年に日秘鉱業を設立したものの、驚くほど早く破綻します。苦労してペルーに

行ったら、誰かが何百年もかけて銀を掘った後だったということがわかったのです。実は、事前に調べに行った田島という技師が先方から接待を受けて、ペルーの銀山は良いものだというレポートを書き、それをもとに日本が判断したのが失敗だったのです。是清は一文無しになりました。

私は、『銀嶺のアンデスー高橋是清のペルー銀山投資の足跡』を執筆し、当時三井串木野鉱山の社長を務めていた五味篤氏にお会いしたことがあります。いろいろな話を聞き、また、是清がペルーに向かったときにお供をした山口慎氏の日記も出てきて、史料が充実しました。是清のペルー銀山開発は、欲得だけではなくて、日本を雄飛させたいという気持ちであったと思っています。

三、金融（日銀）マンとしての高橋是清

さて、一文無しになった是清は、浪人した後、一八九二年、いよいよ日銀に就職します。日清戦争のときは、日銀の下関支店長（当時は西部（さいぶ）支店）を務めていました。当時、日銀は、東京本店のほか支店は大阪と下関の二つしかなく、下関が中国地方と九州の金融を司っていました。日清戦争ですから、広島に大本営があり、政府の要人が朝鮮半島に行くときは必ず下関に寄るので、多くの要人たちと関係を作ることができたのです。その引き立てもあって、一八九九年に日銀副総裁になり、日露戦争に臨むことになります。

これは、日本とロシアの公債利回りのグラフで

図表１　日露公債利回り推移

〔出所〕『日露戦争、資料調達の戦い』

- 戦中4度に渡る日本公債発行
- 金融市場の国際化
  英米独協調引受
- 欧米バンカー達との連携
- 国際金融市場デビュー
- 高橋はクーンローブ商会のヤコブ・シフと友人となる

『日露戦争、資金調達の戦い』
板谷敏彦
新潮選書

す（図表１）。どちらもロンドン市場で日々取引されていました。日本とロシアでは国家としての信用が異なり、一九〇四年の初めは日本公債は五・五％前後、ロシア公債は四・五％弱で取引されていました。このときの債券は、償還もクーポンも同じだったので、比較可能です。

日露戦争が始まると、日本公債は金利が一気に六・五％近くまで上がりました。この後、是清が奮闘してイギリスとアメリカの投資銀行から日本公債を発行してもらい、日本公債の利回りが一気に低下したのですが、それでもまだ差があります。日本の公債発行は、日露戦争中、四度にわたり、一〇ミリオンポンドという単位でお金を調達しました。

その後、次第に両国の利回りが近接してきます。つまり、同じぐらいの信用になっていったということです。最後は、ポーツマス条約が結ばれ

たことにより、ロシアも日本も金利が下がりました。賠償金が得られなかったことで日比谷焼き打ち事件も起きましたが、結果として、ポーツマス条約で平和を迎えたことがよかったのは、この公債利回りでわかると思います。

　このとき是清は、ロンドン、ニューヨーク、ハンブルク、パリの金融業界で様々な知り合いができ、多くの信用を得ます。当時、モルガン商会とニューヨークを二分していたクーン・ローブ商会のヤコブ・シフと昵懇になり、交わした手紙が一二〇通近く残っています。これは英文の史料としてアメリカで販売されていて、私も読みました。二人は、何かあると手紙で親密に意見交換していました。是清の長女を預かってもらい、三年ほどアメリカで暮らしたこともあります。そして、一九一一年、是清は日銀総裁に就任します。

　是清は、昔から松方正義とも親しく、森有礼にも助けてもらっていますから、薩摩閥に近いのです。奥さんも薩摩閥の娘です。そういうこともあって、日銀総裁だった是清に「大蔵大臣をやらないか」という誘いがかかり、一九一三年、山本権兵衛内閣で大蔵大臣になるのですが、ジーメンス事件で内閣が倒壊して、大蔵大臣を続けられなくなりました。山本権兵衛の後、大隈重信内閣、次いで寺内正毅内閣が誕生し、米騒動の後、ようやく日本初の政党内閣、立憲政友会の原敬内閣で念願の大蔵大臣になり、自分の積極財政を実行しようと考えるのです。

　財政政策に関しては「井上準之助　消極財政」「高橋是清　積極財政」と比較されることがありますが、是清は天然の積極財政主義者です。なぜかというと、是清がずっと海外にいたことと、金本位制の時代に日本は産業発展が遅れ、いつも輸出超過になり金貨が出ていくという欠陥を持って

いたからです。是清としては、産業を興して輸出品目を増やし、いつも金が入ってくるような国にしたいと考えていました。特に鉄道投資やインフラの投資には、一生涯、積極的でした。

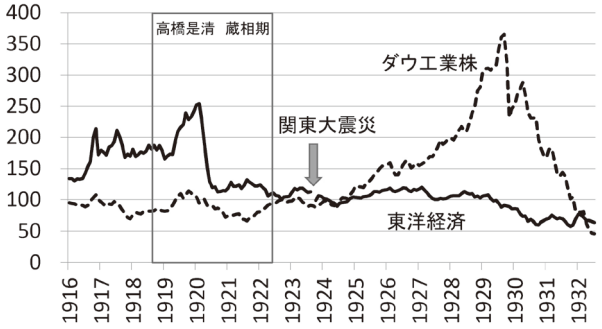
原内閣のときは、第一次世界大戦によって日本が大金持ちになり、一九一八年に戦争が終わったにもかかわらず、日本はその後も好景気が続きます。ヨーロッパの生産能力が途絶えていましたから、彼らの輸出先に日本製品がどんどん出ていったのです。

もう一つの大きな出来事としては、技術革新により、日立モートルや東芝から小型のモーターが誕生しました。昔は、中小企業では水車をグルグル回して動力にしていました。蒸気機関で円運動をつくって、ベルトを入れて、いろんなものにつなげて加工するとなると、大規模な投資が必要でしたが、モーターの時代になると、中小企業は電気を引いてモーターを置けば、すぐ回転運動を得られる。手軽に製造業ができるようになったという背景があります。この当時、創刊間際だった週刊「ダイヤモンド」などが「会社狂の時代」と呼ぶ、ちょっとしたバブルが出現するのです。そのときの大蔵大臣が是清です。

このグラフは、東洋経済株価指数（図表2）です。周りの人間が、「そろそろ引き締めたほうがいい」と助言するのを無視して、原敬も是清も強気一辺倒で金融緩和を続けた結果、バブルが破裂しました。思ったよりも早くヨーロッパの生産能力が回復し、輸出も一気に振るわなくなり、日本の株式相場が暴落してしまったのです。暴落のまま関東大震災を迎えて、日本の株価は上がらなくなりました。

アメリカは、一九二〇年代に「狂騒の二〇年代」という大相場を迎えます。ですが、日本市場

図表２　東洋経済株価指数とダウ工業株価指数



- 是清は日銀総裁井上準之助らからの金融引き締めへの助言を聞かなかった
- 積極財政の失敗

『日本人のための第一次世界大戦史』
板谷敏彦
角川ソフィア文庫

データ：日本証券取引所月報およびセントルイス連銀

は反応しませんでした。つまり、大暴落の影響を受けたまま、さえない展開がずっと続いたということです。是清自身は、これに対して責任を感じていたはずです。誰も口には出しませんでしたが、井上準之助にしても、「だから言ったじゃないですか」という気持ちは持っていたと思います。

実は、中身がよくわからないまま、私は東洋経済株価指数を使っていました。これは、日本証券経済研究所の図書館でお借りした「日本証券取引所月報」から拾った数値です。二年前、明治大学株価指数研究所が作成した通算の株価指数と合わせると、これはかなり正確にできていることがわかっていますから、そのまま使っています。もう一つ、この株価指数は下がりっ放しだと思うかもしれませんが、実は、この時期、配当利回りがすごく高いのです。ですから、トータルのリターン

で見ると結構プラスになっていて、財閥などは利益を得ていたという研究をしている方もいます。

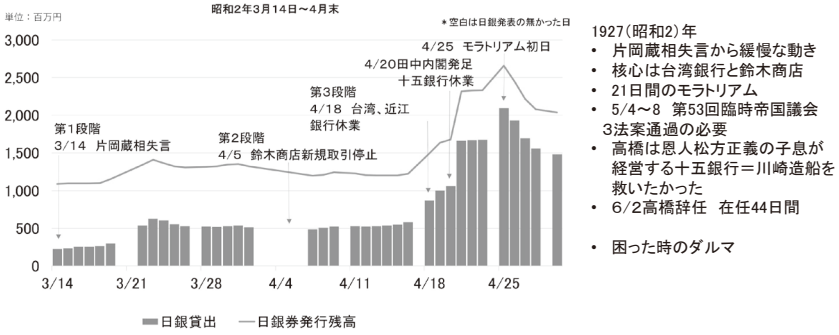
今回、是清の生涯を書くに当たって、第一次世界大戦を知らないと書けないことに気付き、先に『日本人のための第一次世界大戦』を執筆しました。これも週刊「エコノミスト」で二年ほど連載しましたが、準備期間を入れると四年ぐらいかかりました。実は、結構寄り道しながら是清のことを書いています。

先ほど御紹介したクーン・ローブ商会のヤコブ・シフは、ドイツ出身のユダヤ人です。また、ゴールドマンやリーマンもドイツ出身のユダヤ人の投資銀行です。第一次世界大戦のとき、アメリカ政府が連合軍側にファイナンスしようとして、皆反対した経緯があります。戦争前はモルガンとクーン・ローブは二大証券だったのですが、意地を張ったクーン・ローブは、第一次世界大戦が終わったときには昔の面影はありませんでした。その後、日本がファイナンスするとき、是清は気を遣って、「日本は恩義があるから、主幹事はクーン・ローブにしろ」と財務官に言いますが、当時の世界はモルガンが支配していたので、それは無理な話でした。

四、政治家としての高橋是清

大蔵大臣だった是清は、五・一五事件で原敬が暗殺された後、首相に上り詰めます。ただ、是清は、政治家としては困ったことに、人の名前をろくに覚えられませんでした。政友会の誰かが挨拶に来ても、誰だかわからない。黙っていればいいのに、「誰だかわからないやつが来て、こんなことを言っていた」と言うものだから、訪問した人間からすれば、バカにしているのかという話にな

図表３　日本銀行勘定推移



1927（昭和2）年
- 片岡蔵相失言から緩慢な動き
- 核心は台湾銀行と鈴木商店
- 21日間のモラトリアム
- 5/4～8　第53回臨時帝国議会
  3法案通過の必要
- 高橋は恩人松方正義の子息が経営する十五銀行＝川崎造船を救いたかった
- 6/2高橋辞任　在任44日間

- 困った時のダルマ

データ：日本銀行百年史第３巻

り、誰も人がついてこないのです。

その後、政治家としては上手くいかないと思い引退していたところ、陸軍の田中義一が首相になって、「三〇日間だけでいいから、臨時で大蔵大臣をやってくれ」と言われたのが、ちょうど昭和金融恐慌が起きているときでした。日本には、昭和金融恐慌（一九二七年）と昭和恐慌（一九三〇年）の二つの恐慌があります。

昭和金融恐慌は「渡辺銀行が倒産しました」という片岡蔵相の失言で取付騒ぎが起こったと理解されていると思います。一方、これは日銀貸出のグラフですが（図表３）、片岡蔵相の失言があっても、直ちに取付騒ぎが起きたわけではありません。四月五日に鈴木商店の新規取引が停止されて、いよいよ危なくなってくるという状況になって、四月一八日に台湾銀行が休業。華族の銀行と言われる薩長系の十五銀行が四月二〇日に休業に

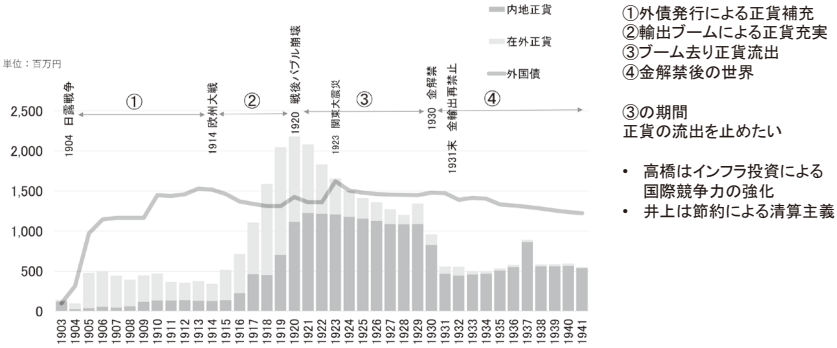
至り、段々と騒ぎが広がりました。是清の出動は四月二五日のモラトリアム前の金曜日で、「三〇日ならやってあげよう」ということで始まったのです。

実は、是清は、鈴木商店の債務を台湾銀行に一本化するときに手伝っています。そういう責任もなくはないので、面倒を見なければいけないと思ったのでしょう。十五銀行は、薩摩の松方正義の長男が経営しています。これと親密な関係にあるのが今の川崎重工業で、松方コレクションで有名な松方幸次郎（松方正義の三男）が経営していました。何とか川崎重工業だけは助けたいと思い、処理をしていくのですが、当初の三〇日を過ぎても辞めず、最終的に在任四四日で辞任しました。

本にも書きましたが、モラトリアム実施後、台湾銀行の救済や財界安定などの法案が議会を通過するかどうかが大問題でした。貴族院での残りの審議は六時間となり、それを過ぎると廃案になるといったところまで迫った際に助け舟を出してくれたのが、日清戦争の財務をひとりでやり切った阪谷芳郎という大蔵省のスーパーエリートです。議員から多くの質問が上がる中、立ち上がり「こんな荒れた海の中を高橋是清という老人船長が舵を切っているのに、やれ右に行け、やれ左に行けとうるさく言うもんじゃない。いろいろ欠陥はあるけれども、私は無条件でこの法案に賛成する」と言ったので、一同が黙って、この法案が通ったという一節があります。是清はよほどうれしく、恩義を感じたようで別の日記に大きく書いてあります。

最近、XなどのSNSを見ていると、「こういうときに高橋是清があらわれて、財政を立て直してくれないかな」。「国債を発行して、日銀に無限

図表４　内外正貨と外国債発行残高



データ：大蔵省百年史　主要財政経済統計

に引き受けてもらうことができる」という投稿を見かけます。最近はそれに消費税減税まで加わってきて、「是清よ、早くあらわれよ」と言うのです。これは大変な誤解に基づいていると言わざるを得ません。その話は、昭和恐慌のときの金解禁と金輸出再禁止、それに続く一連の動きです。明治、大正、昭和の日本政府の財政が何に悩んでいたかを正しく理解することが肝心です。

この棒グラフは、金本位制下で日本が保有していた金貨の量です（図表４）。濃い色の棒グラフは日本国内にある内地正貨（金）で、薄い色は在外正貨です。在外正貨は、例えば香港上海銀行ロンドン支店に預けられている金で、日本政府が貿易をしたときの支払い能力になります。これは金貨を幾ら持っているかというグラフですから、借金は反映されません。この後、日本は日露戦争でできた借金に悩まされていくことになります。国

家予算の三分の一が国債費（借金）、三分の一が軍事費、残りの三分の一で政府を運営していたという状態です。

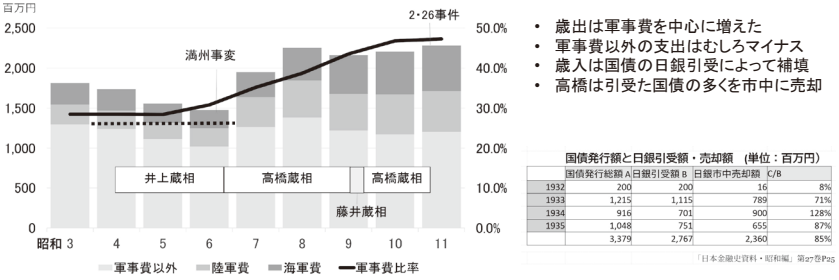
一九〇四年に日露戦争が始まり、図表4の①の期間で在外正貨が増えたのは、是清が外債を発行して獲得しているということです。外貨がなくなってきたら、また債券を発行して外貨を集める。ただ、日本国の名前を出すと信用にかかわるので、例えば鉄道債とか、電力債とか、名前を変えて外貨を集めていました。

ところが、一九一四年に第一次世界大戦が始まると、軍需製品を作るために、交戦国がこれまで輸出していた製品を作れなくなり、その輸出先に日本製品が出回るようになります。これで日本の輸出が大きく伸びて、外貨がどんどん入ってくる流れが一九二〇年まで続きました。

是清が大蔵大臣を務めていたのが一九年、二〇年で、この頃は外貨が大量に入り、強気一辺倒になっていました。是清としては、一気に日本のインフラを拡充して、この後、外貨が入ってくる体質に変えようという考えで進んでいったのですが、あいにくバブルが崩壊して、正貨が次々と流出していきます。放っておいたらまた外貨がなくなるという危機感を持ったのが③の時期です。そして、関東大震災で在外正貨が減ることになります。

このときに井上準之助と是清が対立します。井上は、金融を引き締めて、輸入を減らして外貨の流出を止め、競争力のない企業を淘汰して強くしようとする、清算主義という考え方の立場です。一方で、金解禁などしなくていいというのが是清の考え方です。是清は、相変わらずインフラに投資して、地道に競争力をつけようと考えていたのです。決して目先の景気対策でどうこうしたわけ

図表５　一般会計歳出額と軍事費



国債発行額と日銀引受額・売却額　（単位：百万円）

	国債発行総額 A	日銀引受額 B	日銀市中売却額	C/B
1932	200	200	16	8%
1933	1,215	1,115	789	71%
1934	916	701	900	128%
1935	1,048	751	655	87%
	3,379	2,767	2,360	85%

「日本金融史資料・昭和編」第27巻P25

データ：大蔵省百年史　別巻統計

ではないというのが一つのポイントになると思います。

是清が金輸出を再禁止した後は、内地正貨は半分近くに減り、在外正貨はほとんどないという無残な状態になり、日本の金貨の量は、第一次世界大戦前と同じような水準まで落ちてしまいました。なお、このデータも三七年以降は信憑性に欠けるようになります。

是清があらわれて、財政支出をどんどんやってくれというときに参考にしたのが、このグラフ（図表５）です。これは一般会計の歳出額と軍事費を示しています。井上蔵相は、金解禁をするために財政を縮小していきましたが、軍事費はなかなか減らず、軍事費以外の一般歳出が減っていっている様子がわかると思います。

井上蔵相から是清に代わると、農村匡救事業などの予算が入り、歳出が大きく増えますが、満州

事変があったので、実は増えた部分は軍事費が大半だということがわかります。それ以降、軍事費の比率が五〇％近くまで上昇していきます。軍事費が歳出額の半分というのは大変な比率です。

ここで注意したいのは、軍事費以外の支出はそこまで増えていないことです。どんどん財政支出して景気をよくしようという人は、これを見た方がよいでしょう。軍事費が大半だったということで、昭和三年の水準にすら戻っていません。経済成長率を考慮すると、軍事費以外はマイナス予算だったというのが、今の一般的な理解です。

このときも、歳入は国債の日銀引受によって補填しました。今また、内国債であれば幾ら発行しても日本は破綻しないような言い方をする人がいます。理屈としてはそうなのですが、日本の通貨がどんどん薄まっていくことになります。

是清は、日銀引受した金額の多くをを市中に放出していました。銀行団シンジケートをつくって、ここに余力が出たら、日銀で持っている部分を買い取ってもらっています。日銀引受で発行した債券の八五％は、最終的に市中に戻されていたのですが、是清が殺された後、これが日銀に残っていくことになります。

では、どうして是清の財政は景気がよかったのでしょうか。理由の一つには、軍事費を増やしたこともあります。これは、『横浜正金銀行全史』から日時のデータを拾って作成した為替相場のグラフで、下に行くと円安方向です（図表6）。明治維新から、一ドル＝二円、一ポンド＝一〇円というのが相場で、日露戦争のときもこのレートでした。井上準之助が金解禁したときは、一〇〇円＝約五〇ドル（一ドル＝約二円）でした。そして、是清が金本位制をやめた後、しばらくの間、相場が立たず、一九三一年一二月一八日に開いた

図表６　正金対米電信売り建値

1ドル＝50円から20円へ－60%
激しい円安が景気回復を促した

『国家の命運は金融にあり』
板谷敏彦
新潮社

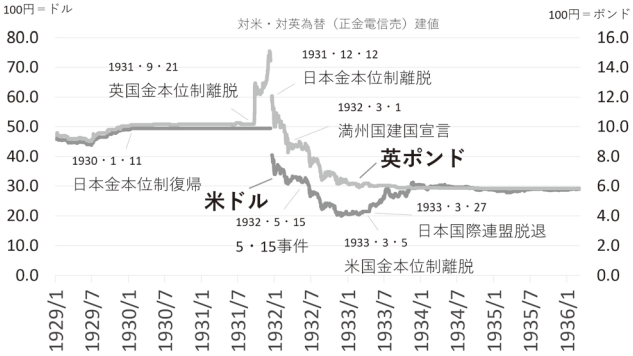
データ：横浜正金銀行全史第６巻

ときは四〇ドルになっていました。一気に一〇ドル下がったのです。この後、満州国の承認、五・一五事件の発生、日満議定書の締結など、日本が国際的信用を失い、円の価値が下落していったことがわかります。

一九三三年二月二四日、金本位制停止からまだ一年と少しが経過したとき、日本が国際連盟も離脱したという過程の中で、極端な円安が進行していました。日本史の教科書はなぜこういうことを書かないのかと思うのですが、これは現在で言えば、一ドル＝一〇〇円だった相場が一年間で一ドル＝二五〇円になったというイメージです。当然、輸出競争力が一気に上がりました。是清の財政出動で景気が回復したかのように語られていますが、そうではなくて、この円安の影響がかなり大きいのです。

次に、英ポンドと米ドルの為替を見ておきま

図表７　金本位制とドルとポンド



1941（昭和16）年開戦前
上海では
100円＝12ドル程度で取引
されていた。
1ドル2円だった円は8円に

データ：横浜正金銀行全史第６巻

しょう（図表７）。グラフの上は円高方向、下は円安方向です。井上準之助により、一九三〇年一月に金本位制に復帰してから、ポンドもドルも同じような動きをしています。ところが、途中で英国がギブアップして、一九三一年九月に金本位制を離脱します。この時、対ポンドで円高になっていますが、同年一二月に日本が金本位制を離脱すると、対ポンドも対米ドルも今度は円安が進行します。「相場はなるようになる」という考え方のもと、是清はこれを放置していたのですが、今度はアメリカがギブアップして、三三年に金本位制を離脱すると、対ドルに対して円高になります。ポンドは動いていませんから、ドルの独歩安の状態です。

日本が国際連盟を脱退した一九三三年頃は、三つの相場が安定してきたので、ここからは連動してコントロールしようということで、上下のブレ

はどうしても若干出ますが、是清はこのときポンドにペッグするように為替を戻しています。やはり安定した方がいいと考えていたわけです。

このグラフが切れた先がどうなったかというと、一九三六年に二・二六事件が起こり、ファイナンスをしていけば日本円が薄まり、どんどん安くなるということで、一ドル＝二円だった円は、太平洋戦争開戦前の上海では一ドル＝約八円、四分の一になっていました。当時の戦略物資は石油と鉄で、どちらもドル建てで取引されていました。四倍ですから、軍事費を倍にしても追いつきません。これは今の日本にも言えることで、最近の近代兵器の核心部分はドル建てなので、防衛費のために国債を刷って円安を招くと元の木阿弥になるという教訓を、是清は残しているのだと思います。

五、まとめ

本日のタイトルにある「今日的意義」というのは難しいところがありますが、本日の話をまとめますと、まず、是清は語学で世に出ました。銀紙と米相場のエピソードを御紹介しましたが、通貨の価値下落を痛いほど知ったと思います。

特許制度の研修ではアメリカ政府に世話になりました。どう世話になったかといいますと、「登録した特許の資料をくれ」と言ったら、「これは発行しているものだから買ってくれ」と言われたけれども、日本の予算ではとても買えない金額だった。その事情を話すと、「わかった。将来日本で特許の資料ができたら、ただで送ってくれれば、交換ということであげる」と言ってくれたのです。アメリカというのは、最初の頃だけです

が、実はそんなに優しい国なのです。それで是清はアメリカに近づいたと言えると思います。

ペルーの銀山開発は、一儲けしようとして失敗した山師のように長い間言われていたのですが、そうではなく、純粋な気持ちだったということです。

日露戦争では、日本は国債金融市場のメンバーになれました。第一次世界大戦後の好況期にバブルをつくって崩壊させてしまった是清は、その後悔をずっと持っていました。

昭和金融恐慌の火消しをしたので、このときに、「是清がいれば何とかなる」という気持ちが国民の間に広がります。「困ったときのダルマ」です。その後、何度も政友会と喧嘩して政党人でもなくなったのですが、政権がかわろうと、軍人になろうと、ずっと大蔵大臣を務めることになりました。

井上準之助も是清も、同じ正貨問題に取り組んでいました。見方を少し変えれば、方策がすぐに変わるような話だったということです。また、是清の財政が大変な円安を招いたということは覚えておいてほしいと思います。

是清は、前田正名譲りで、問題は根本から解決しなければいけない、根本問題を見据えてデータをそろえるという考え方です。ですから、今もし生きていたら、「積極財政をやりなさい」とは言わない。それよりも、「日本の国が持っている根本的な問題にもう少し目を向けたらどうだ」と言うのではないかと思います。

私の話は以上です。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○森本理事長　板谷様、高橋是清の多岐にわたる事績を要領よく説いていただいて、ありがとうご

ざいます。

それでは、皆様から御意見、御質問をいただきたいと思います。

日銀のバランスシートを見ますと、今の状況の方がはるかに日銀引受を行っていますが、今の日本人の是清に対するイメージは、国債の日銀引受や積極財政なのでしょうか。もしそうだとしたら、それは歴史の叙述に何か問題があるのでしょうか。

○板谷　私が執筆した本のまとめにも書いておきましたが、是清に対する評価は随分変わってきています。第二次世界大戦直後に検討された論文が日銀と大蔵省から出て、是清が日銀引受をしたために財政破綻した、しかも軍事費を調達したから、日本は不幸な第二次世界大戦へと向かっていったのだということで、当時は非常に低い評価でした。

その評価が変わったのは、特に世界中のデータが手に入るようになった昭和四〇年頃です。国際経済学の立場から、一九三〇年代の不況脱出は日本が一番早かったという分析が出てきて、一転して、是清は景気回復に大きく貢献していたと評価されるようになります。ただ、そういった論文は、先ほど御説明したような、極端な円安の影響がしっかりと検証されていない状態で、財政投資が増えたという部分だけで評価されている面があります。

このような経緯を経て是清が見直されてきた中で、今度はリフレ派と呼ばれる人たちが台頭してきました。レジーム・チェンジという言い方をしますが、これから景気回復を目指して財政投資するぞ、マネーを増やすぞと言えば、インフレが起こって景気がよくなるという考え方のときに、「是清さえいれば」と言われたのではないかと思

います。

○質問者A　今日的な文脈の中で、もし是清が暗殺されなかったら、どのような経済政策をとり、その結果、何か歴史的な大きな変化があったと思われることがあれば、教えてください。

○板谷　是清の最後の方の政治活動を見ていますと、青息吐息といいますか、かなり消耗しながら軍に抵抗して、やっと予算を通している状態でした。そのため、是清がもし生きていたとしても、予算審議は肉体的に耐えらず、大きなことを成し遂げることは難しかったでしょう。また、前田正名や是清は、農村は自助努力するべきという考え方が根本にありました。一方、二・二六事件を決起した青年将校は、農村の困窮をよそに、財閥と結託して一部の金持ちだけがいい思いをしている点を不満に思っており、それを体現していた一人が是清だったのです。赤坂にある大きな屋敷で孫たちと戯れている写真が「毎日グラフ」に載った一方で、兵隊たちの故郷では、家族が身売りされている状況であったので、恨みが募ったのも自然なことなのかもしれません。

○森本理事長　御本を拝読しますと、是清は、もっと早い段階から、例えば参謀本部廃止論とか、軍部の独走には相当な異論を公にしていて、その考えと是清の財政金融の路線はリンクしているように思います。つまり、軍事よりも民間経済優先という是清の考えは、当時の日本を覆う全体の動向の中では通じなかったのでしょうか。

○板谷　「タイムズ」を読んだりして世界情勢に詳しかった是清は、第一次世界大戦で参謀本部を持っていたドイツ軍が敗れたので、何故、日本だけが敗れた国の制度を持っているのだという基本的な疑問がありました。参謀本部とすれば、陸軍官僚として許せる話ではないので、組織防衛のた

めに潰していくということです。ただ、参謀本部廃止論を唱えている人もいました。山縣有朋なども、自分がつくったものではあるが、一時、廃止を考えたようです。

今、ロシアは一方的にウクライナへ軍事侵攻を行っていますが、国民はプーチン大統領を支持しています。要するに、虚構のニュースの中に生きているのです。そして、ロシアだけはなく、アメリカも懸念されています。ウクライナがロシアを脅かしたという話をトランプ大統領が本当に信じていて、世界が驚愕しました。また、ヴァンス副大統領がゼレンスキー大統領との会談の際に感謝することを求めました。ゼレンスキー大統領にすれば、民主主義の最前線で権威主義国家と命がけで戦っているという自負があったのに、頭を下げろと言われたのです。これには見ていた世界中がショックを受けました。

ロシアと国境を接するヨーロッパの国からすると驚きの世界ですが、現実に今、一定のアメリカ国民はトランプ大統領を支持しており、メディアによっても、こうした出来事に対する報じ方が異なっている状況です。

○質問者Ｂ　是清が特許制度を法案として出そうとしたとき、こんな制度をつくったら日本の製造業はだめになると大反対が起こったそうです。当時の日本の製造業のレベルは、戦後の香港フラワーのようなレベルだったのかなと思いますが、それをどのようにして彼は実現したのでしょうか。

また、これは私の感想ですが、当時の七十四銀行は絹の商売に融資していたところ、第一次世界大戦後、絹の価格が三分の一になって、一九二〇年に倒産します。絹は横浜での最大の輸出品目ですから、その倒産した銀行を何とかしようという

ので、原富太郎が一九二〇年に横浜興信銀行を設立しました。当時、是清は、七十四銀行の破綻に伴う政府の救済策について反対するのですが、原富太郎が直談判して、最終的には預金をカットするという条件で政府が資金を出すことになり、それが横浜銀行のもとになっているのです。是清には様々な側面があり、おもしろい人だなと思います。

○板谷　是清が特許に関して特に何かしたわけではなくて、日本の産業が進化していくにつれて、守らなければいけないものが出てきたのだと思います。多くの国で、物真似をしてそっくりな製品を作ったが品質は悪かった、という事例があります。ですから、進化するとともに解消していったのだと思います。援助しなかったというのは、自助努力をするべきという前田正名の影響ではないでしょうか。農業製品に対しては厳しかったようですので、絹もその一環だと思います。

○森本理事長　本日の「資本市場を考える会」は以上とさせていただきます。

改めまして、板谷様、大変貴重なお話をありがとうございました。（拍手）

（いたや　としひこ・作家）

（本稿は、令和七年六月九日に開催した講演会での要旨を整理したものであり、文責は当研究所にある。）

板　谷　敏　彦　氏

御　略　歴

関西学院大学経済学部卒業。IHI 造船部門を経て日興證券へ。NY 駐在、プログラム・トレーダー、機関投資家営業等を経験。その後内外証券会社幹部、和製ヘッジファンドを設立して話題となる。

主な著書

『日露戦争、資金調達の戦い』（新潮選書 2012年）

『金融の世界史』（新潮選書 2013年）

『日本人のための第一次世界大戦史』（角川ソフィア文庫 2020年）

『国家の命運は金融にあり 高橋是清の生涯』（新潮社 2024年）など